

そろばんで唐い人⑨5



そろばんの人生

富山県「蜃気楼の見える街」魚津市 保要 孝三

遠い昔の話になります。1957年の秋でした。8歳年上の姉が自宅でそろばんを弾く姿を見て、指の動きや珠の音に魅了されたことが、私の原点となりました。

裕福とは言えない家庭でしたが、どうしても習いたくて親に懇願し、そろばん塾に通わせてもらうことになりました。

当時としては珍しい、小学1年生での入門でした。当然九九もまだ覚えておらず、最初の9級受験では、問題用紙に九九の一覧表を添えて挑みましたが、不合格。それでも楽しく、面白く感じた記憶があります。

翌年3月には7・8・9級を同日に受験し、すべて合格。このときの喜びと自信が、次へのステップとなったのだと思います。

2年生の3月には、ついに3級に合格。この頃から、近隣の人やクラスメイトから注目されるようになりました。その後もつまずきながらも努力を続け、4年生でようやく全珠連の1級に合格。ならばと、さらに上を目指して日商1級にも挑戦したものの、伝票算に何度も阻まれ、いつの間にか挫折してしまいました。

時が流れること約10年。1973年、私は会計事務所に就職し、再びそろばんとの再会を果たします。当時はまだ電卓が普及しておらず、国鉄（現在のJR）などの窓口でも、そろばんが主流でした。

しかし、その後の10年ほどで、関与先の事務員がそろばんを使う姿は、ほとんど見られなくなり、世の中あっという間に電卓時代に入りました。

そのようななか、意地というより「昔取った杵柄」として、私は「そろばんの方が速くてやりやすい」と信じて使い続けました。そして、気がつけば50年。周囲には違和感や驚きを持たれたかもし

れません。

現役生活を終えた一昨年。特に趣味もなく、これからのお後を考えるなかで、「何かしなければ」と思い立ちました。そして、50年の経験を生かし、「1級満点合格」を新たな目標に掲げました。

近所の瀬戸珠算教室の門をたたき、小中学生と机を並べ、先生の親身なご指導を受けながら、まずは「とにかく合格を」と、無心で1回目の受験に挑みました。結果は1問違いでの合格。予想以上の手応えを感じ、2回目に向けて日々練習を重ねました。

徐々に上向き、可能性が高いことを感じるようになりましたが、緊張が思わず壁となりました。2回目、3回目、4回目と「よ~い、始め」の声と同時に極度の緊張が走り、指先がままならず、時間ぎりぎりの解答。これでは到底、満点は望めません。

トラウマになるのではと心配しましたが、5回目の挑戦では少し緊張も和らぎ、昨年（2025年昭和100年）2月、74歳にしてようやく念願の満点合格。これ以上ない喜びに包まれました。

最後に、私は「そろばんとは、根気強さと、たゆまぬ練習がすべて」だと信じています。その成果は、計算力にとどまらず、集中力や忍耐力など、多くの面に波及します。

そのことを、ぜひ若い世代や、子どもを持つ親御さんにも知っていただきたいと強く願っています。

